

絵本に描かれる「友情」イメージと友情至上主義の社会学的分析

磯辺 菜々

A Sociological Analysis of the Image of Friendship and Friend Supremacism in Picture Books

Nana ISOBE

1. はじめに

「つながり」や「絆」がもてはやされる昨今、「友情」への注目が集まっている。Facebookをはじめとした SNS では、友だちの数や交流の様子がつねに可視化されるようになった。また、『友だちの数で寿命はきまる』（石川 2014）といった友だちの効用を説く本や、『「友達力」で決まる！—子供の「人間関係力」を育むために、親にしかできないこと—』（親野 2007）のように親を対象とした本、『友だちが増える話し方のコツ』（西出 2009）をはじめとした子ども対象の友だちづくりノウハウ本などが多数出版されていることから、現代社会における「友情」への関心の高さがうかがえる。

それではそもそも、社会において「友情」とはどのようなものとしてイメージされているのだろうか。本稿では、絵本に表される子どもの「友情」イメージを抽出し、またそこに反映される大人の側の願望やねらいに迫ることを目的とする。

2 節では、「友情」に関する哲学的議論や社会学的研究の流れを追い、分析の観点を整理する。3 節では、友だちをメインテーマとして扱っている絵本の分析を通して、子どもの「友情」の描かれ方の特徴や、そこに込められたメッセージを詳しく見ていく。4 節では、絵本における「友情」のイメージ提示がどのような意味を持っているのかを考察し、5 節では総括的なまとめを行う。

2. 「友情」の分析視角

2.1 「友情」に関する議論

「友情」とは、古代より大きな興味を惹きつけてきたテーマといえる。しかし、「友情」は制度化されない個人的なものと考えられるがゆえにさまざまに解釈され、明確な基準や定義を設定することが難しい。ここでは、「友情」についての議論の簡単な系譜を示す中で、「友情」

という概念に含まれる様々な要素を見る。

2.1-1 「友情」の哲学的議論の系譜

現代の社会における一般的なイメージとして、しばしば「友情」は、そのまま「親密さ」の問題だと見做されがちであるように思われる。しかし、古代から哲学者や思想家たちによって語られてきた友情論には、様々な見方が存在する。アリストテレスは『ニコマコス倫理学』において、友情はひらかれた社会的空間において共に議論をする中で育まれるものと述べ、意見や利害の一致などは友情の本質ではないとした (Lucrece 1948=2014)。またキケロも『ラエリウス』において、友情はあくまで公的なものだとし、かつ友情の本質は親密な雰囲気や連帯感、一体感ではないと主張している (Cicero 1990=2004)。それに対しモンテーニュは、『エッセー』の「友情について」において、友情はあくまで閉じた私的生活の内部において生じるという立場をとり、宿命によって結ばれた2者が「分身」のごとく2人で1つになるものが友情だと考えている (Montaigne 1922=1965)。また J・ルソーは『エミール』において、アリストテレスやキケロとは対照的に、閉じた2者間で生じる親密な雰囲気、利害や意見の一致にもとづく助けあいこそが友情の本質的な要素であるとしている (Rousseau 1969=1978)。このように、愛着や親密さが友情の本質か否かが重要な論点となってきたが、ここに I・カントは、友情において「愛」だけでなく「尊敬」という新たな要素を導入し、友情論に新しい見方をもたらした。「友情 (中略) とは、2つの人格が相互に等しい愛と尊敬とによって結合することである。(中略) 愛は引力、尊敬は斥力とみられるのであって、前者の原理は接近を命じ、後者の原理は相互に適当な距離をおくことを求める」 (Kant 1797=2002: 360-361)。

2.1-2 「友情」の社会学的議論の系譜

他方、社会学者によっても友情や絆が考察されてきた。F・テンニースは、「信頼にみちた親密な水いらずの共同生活」 (Tönnies 1887=1977: 35) を営む共同体において、精神的な紐帯によって結ばれる親密な関係を「朋友」と呼んでいる¹ (Tönnies 1887=1977: 52-53)。また G・ジンメルは、生活が様々に分化した現代人にとって、全人的な交わりによって「絶対的な心からの親密さ」 (Simmel 1908=1994: 366) をめざすという伝統的な友情は困難であるとして否定した。そして、対人関係において、距離を保つための「遠慮」や「秘密」という社会学的形式の重要性を主張した (Simmel 1908=1994: 367-371)。そして G. アランも、一心同体をめざす親密な友情観は最高理想にしかすぎず、社会学的見地からすれば極端であると否定している (Allan 1989=1993: 20)。加えて、友情という概念は関係性の種類も及ぶ範囲も多様であることをふまえ、広い角度から検討する必要性を主張した (Allan 1989=1993: 21-22)。さらに、友情の本質は「平等性」にあるとし、「友情のうちにあっては、友人たちは、(中略) 互いを平等に扱い、自分たちの関係の中では全般的に互酬性があり等価交換のなされていることを確信している」と述べている (Allan 1989=1993: 30)。そして、関係における互いの平等性が友情の中核であるからこそ、多くの友情は同じような経済的・社会的位置を占める同質的な人々の間において生まれやすいと説明した (Allan 1989=1993: 34)。

まとめると、友情に関する議論全体を通して、「平等性・対等性」が友情の前提となっており、力の釣り合った互酬的な関係が友情の基本的関係として想定されている。また、友情の理念に関しては大きく分けて2つの立場が存在する。友情において、同質性を軸にして親密かつ一心同体な結びつきを志向するものと、異質性を軸にして友だちとの間にある程度の距離を置くことを重要視するものである。このように様々に友情の理念型が語られてきたが、これらは成人同士の友情を前提とした学者たちによる議論だった。それでは、子どもにはどのようにして「友情」が示されるのだろうか。子どもに提示される「友情」理念を追うことは、社会においてイメージされている「友情」にせまる手がかりになると考えられる。先述した対等性、親密さ、距離感などといった観点をふまえながら、子どもの「友情」はどう描かれるのかに関して、子ども向け絵本を対象として分析していきたい。

2.2 本稿の課題

本研究では、主に幼児期から学齢期の子どもにおける、個人と個人、または集団における個人間の「友情」の概念はどのようなものであるかを調べる。ここでは、現実における子ども同士の個々の実際的な関係性²ではなく、大人たちがイメージとして語る子どもの「友情」に着目する。このために、子ども向けの絵本を調査対象に選び、「友情」のイメージに関する描写の分析を行なった。絵本を対象にする意義としては、絵本が子どもの学びや発達に大きな影響を与えうる媒体であること³、また絵本にはしばしば社会の価値観が反映されること⁴が挙げられる。アリエスが指摘した近代的な子ども観（Aries 1960=1980）をふまえると、子ども向けの絵本には、大人と区別された「子ども」に対する大人たち自身の期待や思い、葛藤などが色濃く反映されているといえる。そのような重要な表象媒体として絵本を捉え分析をした先行研究としては、山名淳の研究が挙げられる（山名 2012）。山名は、子どものしつけの問題をめぐる大人たちの葛藤や社会の様相を、絵本の中に丹念に読み込んでいる。本稿では、絵本において描かれる「友情」の中に、社会における子どもの「友情」イメージだけでなく、そこに映しだされている大人の側の期待や思いも読み解きたい。

また、これまでに、絵本において「友情」がどのように扱われているかを具体的に分析した研究もいくつかある⁵が、子どもの発達における友だちの重要性を確認するにとどまるものがほとんどである。それに対し本稿では、複数の視点や分析軸を用いて子どもの「友情」イメージを分析的に捉えることを試みる。

3. 絵本に描かれる「友情」

3.1 調査の対象と分析方法

3.1-1 資料の選定

調査に際しては、京都府のこどもみらい館子育て図書館所蔵の絵本を対象とした⁶。就学前

後の子どもを主な対象とする物語絵本のうち、「友情」や友だち関係がメインテーマとなるもの（以下「友だち絵本」と表記する）を選出するにあたり、以下の二段階の作業をおこなった。

まず、本のタイトル中に「ともだち」「おともだち」が含まれるものをピックアップしてリストを作成した。これによって選び出された作品は、1970—2010年代出版の絵本計146点である。この年代別出版点数の内訳は、70年代3点、80年代11点、90年代25点、2000年代87点、2010-2015年21点であった。このうち、友だち絵本の出版点数が圧倒的に多い2000年代以降発行の作品計107点に限定することとした⁷。

さらにここから、創作作品ではないもの（昔話・伝記など）や、「ともだち」という用語を「人格をもった、親しく交流する存在」という意味で用いてはいないもの（「しぜんはともだち」など）を除外した結果、対象となる絵本は91点にまで絞られた。これらの中に描かれる「友情」のイメージを取り上げることとする。

3.1-2 分析の視点

分析に際しては、友だち絵本における全体的な特徴と、「友情」のパターンについての類型的な分析という2つの観点で見ることとした。類型的な分析の段階においては、物語構造と、自己と他者の距離感に着目した。

3.2 全体の特徴

はじめに、友だち絵本における「友情」の描かれ方の全体的な特徴を述べる。

3.2-1 友情至上主義と「ひとり」イメージ

ほぼ全ての友だち絵本では、友だちということの絶対的、肯定的な価値が強調される⁸。「みんなであそぶとたのしいね!」と語ったり、元気のなかった主人公が友だちと遊ぶことで笑顔を取り戻すといった描写を通して、「友情」の絶対的効用が示される。本稿では、このように「友情」に絶対の価値を置く見方に対し「友情至上主義」という言葉を用いることとする。ここで特筆すべきは、「友情至上主義」はたいてい、「ひとり」蔑視とセットになっているということである。例えば、友だちのいない「ひとり」の状態の主人公は、たいてい猫背やうつむきがちでさみしげな表情をし、薄暗い穴ぐらや部屋の隅などにひとりで座り込んでいる。そのような状態に対し「ひとりぼっち」という言葉が用いられることも多く、主人公は「いつもとてもさみしく」(A) 感じたり、「とじこめられてるみたいでくるしい」(B) という感情を語る。そして「だれかともだちになってくれないかなあ。だれでもいいから」(C) と友だちを切実に欲するのである。また、こういった「ひとり」の状態は本人の性格上の問題に帰属されることが多く、「他者を怖がる」、「恥ずかしがり・引っ込み思案」、「自己中心的」などの特徴が描かれる。そして主人公は、自らの気づきと努力を以てこれらの性格を克服してはじめて、友だちができて笑顔になるのである。

3.2-2 登場人物の擬人化

続いて、「友情」を構成する登場人物の特徴について着目する。「友情」の構成員が、人間のみの場合、動物・無生物（月や雪だるまなど）のみの場合、人間と動物・無生物混合の場合で分け、なおかつ、その中で男女の区別はいかになされているかを調べた⁹。その結果が表1である。

表1 友だち絵本における登場人物の構成

	人間のみの	動物・無生物のみの	人間と動物・無生物混合	計
男のみ	1	15	5	21
女のみ	1	1	2	4
男女混合	7	24	7	38
性別不明	0	23	5	28
計	9	63	19	91

大きな特徴として挙げられるのは、絵本においては実際の人間の子どもどうしの「友情」ではなく、動物どうしの「友情」が圧倒的に多く描かれるということである。これは、登場人物を動物や無生物に置き換えることによって、ジェンダーや人種、その他様々な特質を捨象することができるからだと考えられる。

3.2-3 ジェンダーをこえた「友情」

ジェンダーに関する描写には、次の2点の特徴が挙げられる。1点目は、先述したように登場人物を動物や無生物に置き換えることで、性別の違いを意識させないようにしているということである。2点目は、人間のみの、動物・無生物のみの、もしくは両者混合の登場人物の場合すべてにおいて、男女混合型の「友情」が一番多く描かれるということである。これは、男女どちらかに偏らせずに「友情」を描くことで、男女平等の意識や、男女の区別なく仲良くすることを教育的メッセージとして込めているためだと推察される。

このように、「友情」を描く友だち絵本においては、登場人物を動物や無生物に置き換えることで性別を意識させにくくしたり、男女混合の「友情」を多く描いたりすることによって、ジェンダーによる違いが明確化されないような工夫がなされていることがわかった。

3.3 それぞれの「友情」の特徴

次に、様々なパターンの「友情」について、比較しながら特徴を述べていく。

3.3-1 「友情」の類型

絵本に描かれる「友情」を見ていくと、関係性においていくつかの特徴が浮かび上がってくる。まず、2.1 において先述したように、哲学においては同質性が「友情」の議論における1つの軸となってきたが、絵本においても同質性に基づく親密な関係が非常に多く描かれている

ことが見受けられた。例えば、友だち同士見た目や行動もそっくりでまるで双子であるかのよう描かれたり、外見は違っても感じ方や価値観といった内面が似ていることが強調される。また、それとは対比的に、互いの見た目や価値観などが全く異なるという点をあえて重視する作品も、少数ながら見て取れた。加えて、描かれる友だち関係の範囲にも着目することができる。主人公ともう1人の親友との絆を描くものもあれば、近所の4,5人のグループで遊ぶ様子や、保育園のクラスなどひとまとまりの集団内で仲良く生活する様子を描くものがあった。

以上から、友情を捉える際には、2つの視点があるといえる。1点目は、友だちとの関係性において、同質性を軸にするものと、異質性を尊重するものである。2点目は、「友情」の成立範囲が特定の関係に閉じられているもの、または外部へと開いているものである。これらに関して、本稿では以下の用語を用いる。「友情」において同質性を軸にするものを「融合型」、異質性を尊重するものを「自律型」、また関係が内部に閉じているものを「内部収束型」、外部へと開くものを「外部拡大型」と名付ける。これらを用いて、図1のように類型化した¹⁰。

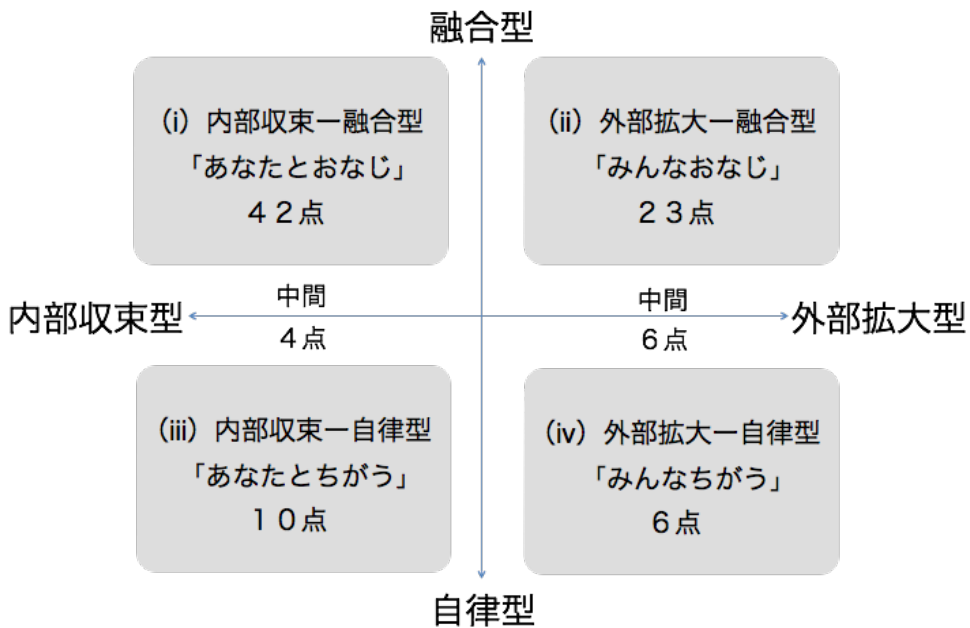


図1 「友情」の類型

(i) の内部収束—融合型は、何でも分かり合いいつでも一緒に行動するというような、2者間における心身の距離の近さや同質性が関係の核となる。代表例としては、『たったひとりのともだち』(D) が挙げられる。孤独なカラスと少年が、互いをたったひとりの理解者としてみなし、共に心を通わせ合い、「きみはぼくのたったひとりのともだちだよ」と承認しながら、深く緊密な関係を築いていく。

(ii) の内部収束—自律型は、友だちとの距離の近さや同質性は志向せず、「離れていても思

い合う」などといった情愛と信頼の深さが「友情」のしるしとなる。また意見対立の際には友だちの意思を尊重する様子が描かれる。代表例としては、『ムーミンのともだち』(E)がある。異質な環境に住み異質な意見を持つなど、ムーミンとその友だちスナフキンの間における異質性が描かれ、それを承認・尊重することが「友情」の軸となる。

(iii) の外部拡大-融合型では、大勢で協調してあそぶことに価値が置かれる。代表例としては、『ともだちいっぱい』(F)が挙げられる。保育園児たちが「ともだちのともだちは、ともだち」を掲げて「友情」を容易に拡大しながら、みんなで一緒に同じ遊びをする様子が描かれている。

(iv) の外部拡大-自律型では、さまざまな個性を持った集団が、互いの違いを受容・尊重しながら共存する関係が描かれる。代表例としては、『エルマーのともだち』(G)がある。ゾウやネズミやライオンなど見た目も性格も違う様々な登場人物たちが、互いの個性を認めながら仲良く暮らす。

このように、絵本に描かれる「友情」パターンは四類型に分けることができ、それぞれの数は(i) 内部収束・融合型が42点、(ii) 外部拡大・融合型が23点、(iii) 内部収束・自律型が10点、(iv) 外部拡大・自律型が6点であった。

3.3-2 日本作品と欧米作品における「友情」の描かれ方の違い

今回分析対象とした91点の絵本のうち、日本作品は53点、翻訳された欧米作品¹¹は38点であった。両者における4類型の割合は図2のとおりである。

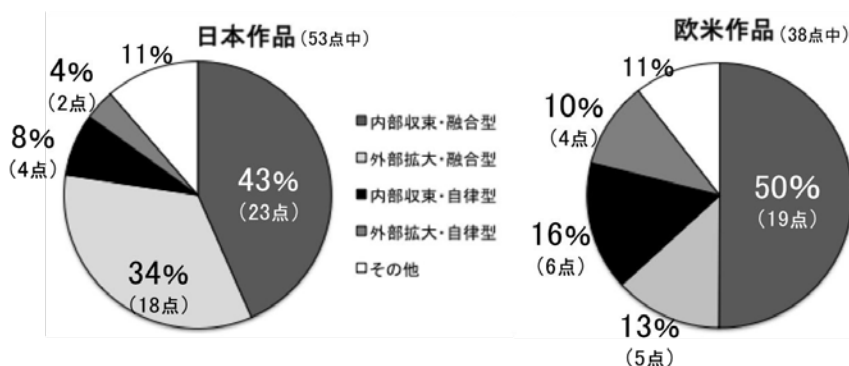


図2 日本・欧米作品における4類型の割合

両者の共通点としては、2者間での親密な「友情」を描く「内部収束・融合型」が日本・欧米ともに43%、50%と、4つの中で突出して多いことである。また、その中で「ずっといっしょ」「なんでもわかりあう」といったことを前提とするなど、親密さの志向もよく似ている。このことから、日本・欧米ともに、内部収束・融合型が「友情」の基本形となっていることがわかる。

相違点としては以下の2点が挙げられる。1点目は、日本作品において、個人が複数人と

親密になる「外部拡大・融合型」が34%と、欧米の13%に比べ非常に多く、また内容にも違いがあることである。日本作品では、個人が保育園や小学校など特定のコミュニティ内に協調的に溶けこんでいく物語が多く見られるが、欧米作品にはそのようなものは1点を除き見当たらなかった。欧米作品では、保育園や学校といった日常生活の外界へと出て行く中で、主人公が複数の個人と関係を取り結んでいく様子が多く描かれる。

2点目は、欧米作品において、異質性を尊重する「自律型」が比較的多いことである。図2によると、「内部収束・自律型」は日本作品8%に対し欧米作品は16%、また「外部拡大・自律型」は日本作品4%に対し欧米作品は10%と、欧米作品の方が比較的多い割合で描かれていた。2者間の内部収束型にせよ、複数人の外部拡大型にせよ、友だち同士の個性や意見の違いといった異質性を積極的に認める関係性は、欧米作品においてより多く提示されるのである。

これら2点の相違点は、日本と欧米における個人の意識の違いを反映していると考えられる。日本作品に「みんないっしょ」の外部拡大・融合型が多く見られたのは、日本の共同体を重んじる意識を反映しているからではないだろうか。「保育園でみんなとなかよくしてほしい、溶け込んでほしい」という我が子のスムーズな社会化を願う親の願いが表れているといえる。

これに対し、海外、特に西洋においては、あらゆる民族・宗教集団が存在し時に対立してきたという背景に加え、個人の尊厳を重んじる近代的な個人主義が根付いていると一般的に言われる傾向がある。だからこそ、友だちどうし異質な他者として個性や意見の違いを認め合う自律型の友情が、海外の絵本に多く描かれたのだと考えられる。

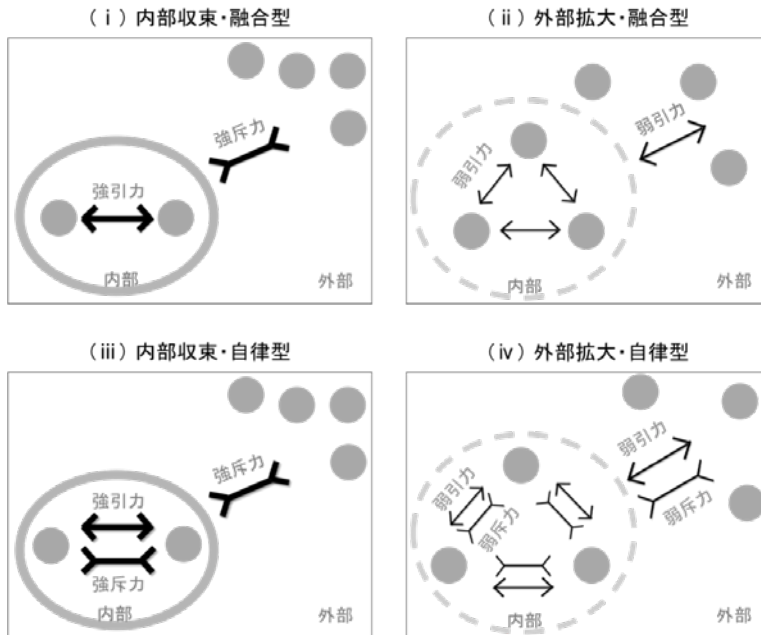
実際、R・ベネディクト（1946=2008）やG・クラーク（1979）らも、欧米人は主義主張や信仰を重んじるのに対し、日本人は身近な人間関係や「世間」を重視するという特徴的な違いを指摘している¹²。このような議論で示される文化的傾向が、絵本においても一部示されるかたちとなった¹³。

3.4 各類型の特徴

次に、3.3-1で述べた4類型について、それぞれ詳細に検討していく。ここでは、「物語構造」を追っていきながら、「自己と他者の距離感」について見ていった。「自己と他者の距離感」を分析するに際しては、「引力」と「斥力」という観点に着目することとしたが、これは2.1-1で先述した、友情を「愛という引力と尊敬という斥力の均衡関係」だと捉えるカントの考えを援用したものである。本稿においては、「愛や愛着を軸とし、互いを一体のものとして距離を縮める力」を「引力」、「尊敬や尊重を軸とし、互いを異なるものとして離す力」を「斥力」と定義する。本節では、特定の友だちとの関係が築かれる空間である「内部」と、友だちではない他者が存在する空間である「外部」のそれぞれに対し、「引力」と「斥力」がどのように作用しているのかを読み取ることを試みた。それぞれの類型における物語展開と、引力・斥力の構造についてまとめたものが図3、図4である。

	物語展開
(i) 内部収束・融合型	欠乏→遭遇→外発的試練(敵の出現・怪我など)→協働・助け合い→友情の成立
(ii) 外部拡大・融合型	欠乏→遭遇→内発的葛藤(個と集団の利害対立)→集団への適応→友情の成立・拡大
(iii) 内部収束・自律型	交流→内発的葛藤(意見対立)→二者間における相互尊重→友情の確認
(iv) 外部拡大・自律型	欠乏→遭遇→内発的葛藤(意見対立)→集団における相互尊重→友情の成立・拡大

図3 各類型の物語展開の特徴


図4 各類型の内部・外部に対する引力・斥力¹⁴

以下、類型ごとに特徴を述べていく。

(i) 内部収束・融合型

代表的な物語構造としては、以下のとおりである。まず、友だちのいない主人公が孤独を持て余している時、1人の他者と出会う。はじめは緊張やぎこちなさが生じるものの、主人公か相手のどちらかが怪我をする・共通の敵が現れるなどの試練に見舞われると、それを2人で協力しあって乗り越え、これを通じて一気に親密な仲になり「友情」が成立する。この類型においては、対立項としての外部(＝友だちでない異質な他者)が意識されることによって、内部(＝友だちである同質な他者)における同質性が確認・強化され、「友情」が強固になるのである。

次に、「内部」と「外部」に対する姿勢を、「引力」と「斥力」の視点から説明する。まず

「内部」について述べると、内部における友だちとの間には、2人で1つとでも言うかのように強力な「引力」が働いている。例えば、二者間では徹底的に「同質であること」が志向される。自分の好きなものを相手も好きかどうかを気にしたり (A)、友だちの怒りや悲しみなどの感情に共感し共鳴するさまが描かれる¹⁵など、似たような価値観や感情を共有することが親密な二者間において重要となる。また、そういった分身のような存在だからこそ、互いを深く理解しているさまも強調される。「ほんとのともだち」ならば「ころがつうじあ」ったり (H)、「かおをみるだけでいまなにをかんがえているのかわか」るのである (I)。

加えて、「外部」の友だちでない他者に対しては、徹底的に排除しようとする強力な「斥力」が働く。例えば、『あしたのともだち』(J)では、最近付き合いが悪くなった友だちのオオカミに対して、キツネは焦燥感をあらわにする。「ぼくのほかにもいいともだちができたの?」「ほ、ほかに! そんなことはない!」「だったら、あしたはゆうがたまであそんでくれる? オオカミさん!」。この会話からは、相手が自分以外の友だち (= 「外部」の他者) を持つことは許されないというような拘束的な関係が窺える。また他の絵本にも、主人公が友だちに対し「きみはぼくのたったひとりのともだちだよ」(D)と語るなど、「外部」に友だちはいないこと、そして「内部」における友だちこそが最重要であることが示唆される。

このように、同質性を基盤とした「内部」における強い「引力」と、「外部」の徹底排除という強い「斥力」が同時に存在することが、内部収束・融合型の特徴である。

(ii) 外部拡大・融合型

代表的な物語構造としては、以下のとおりである。はじめは集団になかなか馴染めないでいた主人公が、他者と出会い、遊びの誘いの拒否やおもちゃの取り合いなどの軋轢が生じる。やがて主人公は多くの他者とうまくやっていくためのルールや社会規範などを学び、自己変革を経て周りに受容され、そして友だちを増やしていく。この類型では、個と集団の利害対立をきっかけに、個々人が集団に適応・社会化していく過程が描かれる。そうして集団ルールに従う中で友だちの同質性が担保され、その同質性の引力によって外部にまで「友情」が拡大されていくのである。ここにおいては、内部収束型とは違い「外部」を排除するのではなく、「みんなともだち」というように全ての他者を友情空間に包摂することが目指される。

次に、「内部」と「外部」に対する姿勢を、「引力」と「斥力」の視点から説明する。まず「内部」においては、皆で同質的・協調的に遊ぶことが志向されるという点で、「引力」が働いている。『ともだちいいな』(K)では、ボールを独り占めして遊んでいた主人公が、他者との関係を通じてボールを譲りあう、喧嘩をしたら素直に謝るなどの協調性を身につけ、最後は「みんなであそぶとたのしいね!」と言いながら楽しく集団で遊ぶ様子が描かれる。また『ともだちいっぱい』(F)では、友だちの好きなものを皆で共有しながら、集団で同じ遊びをし手をつないで「ひとつ」になる様子が描かれる。このように、「友情」が取り結ばれる集団内においては、皆が同じものを好きで同じ行動をするといった同質性・凝集性が前提となっている。

「外部」に対しても、同じく「引力」が働いている。『ともだちいっぱい』(H)には、「ともだちのともだちは、ともだち!」を合言葉にして無制限に友だちを増やしていく描写がある。

自分に直接的関係のない他者にまで友情の範囲を広げ、「みんないっしょ」であろうとするために、ひとつのものとして引き付け合う「引力」が作用するのである。ここにおける「外部」は、「友だちではない異質な他者」ではなく、「友だちになりうる同質な他者」のいる世界として想定される。

このように、集団ルールに従う中で「内部」において友だちとの同質性が確認され、「外部」の他者にもその同質性を広げていこうとする志向がこの類型の特徴である。これは、ある意味自己と他者が未分化であるとも表現できる。

(iii) 内部収束・自律型

代表的な物語構造としては、以下のとおりである。友だち同士で仲良く暮らしていたところ、ある日友だちが旅に出るなど離れ離れになることを迫られる。主人公は、友だちの生活や意思は自分とは違うものであることを受容し、自分の感情を身勝手に押し付けることを控え、友だちの意思を尊重するようになる。こうして、互いにより深まった「友情」を確認しあう。この類型においては、意見対立といった2者間における異質性の確認とその尊重こそが「友情」の軸となっている。外部（＝友だちでない異質な他者）はそもそも意識されず、内部（＝友だちである異質な他者）にのみ目が向けられ、互いの異質性を尊重し合うことを通してより親密になるのである。

次に、「内部」と「外部」に対する姿勢を、「引力」と「斥力」の視点から説明する。まず「内部」について述べると、強い「引力」と「斥力」の釣り合いのとれた状態といえる。互いに情愛や信頼といった情緒的な結びつきが描かれるという点では「引力」があり、かつ互いを異なる他者として距離を置き尊重しあうという点では「斥力」が見られる。この代表的な例に『ムーミンのともだち』(E)が挙げられる。旅に出ようとするスナフキンを、ムーミンは戸惑いつつも次第に受け入れ尊重する。そして別れの際、スナフキンが友だちのしるしとしてムーミンに以下の歌を贈る。「ぼくのともだちすてきなともだち いつもいっしょじゃないけれど あわないときがあるけれど そんなときこそおもいだす おいときこそちかくなるひとりでいるからわかるんだ」。ここでは、「いつもいっしょ」にいるといった密着したふれあい親しさの必要条件にはならず、互いに「ひとりでいる」時間も尊重しながら、相手を思いあうという「引力」と「斥力」の釣り合いのとれた構図が浮き彫りとなる。また、『メルローズとクロックともだちっていいな』(L)では、一緒に暮らしている友だち同士のイヌとワニが、互いに全く異なる長所や短所を述べながら、最後には「ぼくは好き、いまのまんまのきみが好き！」と承認しあう様子が描かれている。ここにも、互いは全く異なる他者であるという自覚と、その異質性の尊重が、2者関係において重要な軸となっていることがわかる。

続いて、「外部」に関しては、(i)のパターンと同じく強い「斥力」が働いていると言える。『メルローズとクロックともだちっていいな』(L)において2者間で共に暮らす様子のみが丹念に描かれているように、「外部」の友だちでない他者はそもそも描写されず、終始主人公とその友だちという2者間で世界が完結している。つまり、親密な「内部」に対して「外部」という世界は無意識的に排除されているのである。

このように、「内部」においては互いに異なる他者としての尊敬・尊重を基盤とした「引力」と「斥力」の平衡状態が保たれ、「外部」に対しては排除しようとする「斥力」が働くということがこの類型の特徴である。

(iv) 外部拡大・自律型

代表的な物語構造としては、以下のとおりである。ひとりだった主人公が、複数の他者と出会い、考えや趣味嗜好の違いから衝突する。やがて主人公は自己と他者は違うという現実を受け入れ、それぞれの個性を尊重するようになり、友だちを増やしていく。この類型では、(ii) 外部拡大・融合型のように個が集団のルールに適応することで同質化していくのではなく、集団内における個と個がそれぞれの異質性と向き合い、そしてそれを受容・尊重することによって「友情」が形成される。そしてその「友情」の対象は外部(＝友だちになりうる異質な他者)へと拡張されていくのである。

次に、「内部」と「外部」に対する姿勢を、「引力」と「斥力」の視点から説明する。まず「内部」の友だちの間では、「引力」と「斥力」が均衡している。集団として仲良く共存することを目指す点では緩やかな「引力」が存在するが、一方で個と個は同質ではなくそれぞれ全く違う個性を持った他者として距離を置いた見方をしているため、この点では「斥力」が働いているといえる。例えば、『エルマーのともだち』(G)では、主人公である象のエルマーは他の象とは違うカラフルな見た目という異質性を持つ。そしてその友だちもライオン、ネズミ、キリンなど多岐にわたり、見た目や性格、特技など全てにおける異質性が強調されながらも、「みんななかよし」であると述べられる。また『と・も・だ・ち』(M)では、はじめ主人公は近所の子どもたちと趣味が合わないとして拒否するも、母親に「もしおともだちをつくりたいのなら、あいてのありのままを、だいじにおもってあげなきゃ」と諭されたことを契機に、相手に歩み寄り、相手の価値観を尊重することで自分もまた尊重されるのだということを学んでいく。まとめると、この類型は(ii)のように集団に適合し同質化することで緊密なつながりを担保するのではなく、それぞれが無理に合わせずそのままの違いを尊重しあうことで、ゆるやかに「引力」と「斥力」を釣り合わせ、適度な距離を保ちながら「友情」を成立させているのである。

そして「外部」に対しても、「引力」と「斥力」が同様に釣り合って働いている。『エルマーのあたらしいともだち』(N)では、主人公エルマーに新しい友だちができたという噂を聞いた友だちが、「エルマーのあたらしいともだちってことは、ぼくらみんなのあたらしいともだちってことだね？」と述べながら、新しい友だちは自分たちとは違うどんな個性を持っているのかということをしきりに話題にしている。こうして彼らの視線は、内部という「友だちである異質な他者」だけでなく、外部の「友だちになりうる異質な他者」にも同様に向けられているのである。そして内部の友だちに対する姿勢と同じく、外部の他者に対してもその異質性が受容・尊重されている。

このように、内部・外部においてそれぞれ自己と他者が全く異なる他者であることを認め距離を置きながら、全ての他者と弱い引力で均質につながっていくあり方がこの類型の特徴で

ある。しかし違った見方をすれば、このあり方は異質性を受容するようであり、実は他人の領域に深く踏み込むことを回避している儀礼的な関係だとも解釈できる。

4. まとめと考察

4.1 分析結果のまとめ

今回対象とした絵本における「友情」の描かれ方には、全体的な特徴として以下の点がある。まずは、友だちがいる状態への絶対的肯定と同時に、「ひとり」の状態に対して否定的な価値付けがなされることである。次に、「友情」の物語の登場人物は擬人化された動物などである場合が圧倒的に多いことが挙げられる。そして、登場人物の性別を明確に描写しない、もしくは男女混合の「友情」を描くなどによってジェンダーによる違いを明確化しないことも明らかとなった。

また、「友情」の関係性のパターンは、(i) 内部収束・融合型、(ii) 外部拡大・融合型、(iii) 内部収束・自律型、(iv) 外部拡大・自律型という四つの類型に分けられた。数を比較すると、内部収束型(計 56 点)は外部拡大型(計 35 点)より多く、また融合型(計 65 点)は自律型(計 16 点)をはるかに上回った。中でも融合型は、日本作品の中では 77% (41 点)を占めるのに対し海外作品では 63% (24 点)にとどまり、日本作品の方が比較的融合型を描く割合が高いことがわかる。とりわけ、日本作品では(ii) 外部拡大・融合型が海外作品に比べ多いことが特徴であった。以上のことから、日本における融合的な「子どもの友情」イメージがうかがえる。また、本稿の分析結果には「大人が『子どもの友情』をどう見ているか」だけでなく、「大人が『友情』自体をどう見ているか」も関わっていると考えられるが、これについては考察で後述する。

4.2 考察

以上の分析結果をふまえて、絵本に描かれる「友情」の特徴やその提示の仕方について考察する。

はじめに、登場人物の多くが擬人化された動物や無生物であったこと、またジェンダーレスな「友情」が多く描かれたことに関する意味を述べる。人物を動物や無生物に置き換えることによって、性別や出自など人間における様々なカテゴリーが無効化される。そうすることで、現実には制約されない「友情」の理想や、自由な「友情」の広がりを描くことが可能となるのである。

では、そのような工夫によって描き出された純粋な理想としての「友情」は、どのような意味を持っているのだろうか。絵本の中で美化されて描かれる「友情」の類型と、それぞれの類型がもつ陥穽について検討したい。

まず(i) 内部収束・融合型は、全対象 91 点中 42 点を占め、もっとも多い類型であった。これは、2 者間において深く親密に交流するという構図が、古くから理想化されてきた「友情」

の典型例かつ基本形であるからだろう。実際、親友と呼べるほどの友だちの存在は、子どもの心理面・社会面における発達に大きく関わるといった効用も様々な研究において明らかにされてきた。しかし懸念点としては、内部収束・融合型の志向が、拘束的な圧力を生じさせるおそれがある。「2人で1つ」の状態を理想とすることは、「他に自分より仲の良い友だちを作ってはいけない」「2人の間で隠し事はしてはいけない」という意識につながりやすく、窮屈な息苦しさを内包しうる¹⁶。

(ii) 外部拡大・融合型は、特に日本作品において多く見られることが特徴であった。これは、子どもに対し、集団にうまく順応してほしいという日本の親や教育者の期待の表れだと言えよう。また、「みんないっしょ」という同質性は、平等性の担保と同時に語られるため、教育や保育の場で受容されやすい¹⁷ということも推察される。一方、この類型に含まれる問題点としては、全員が仲良くわかり合う世界において、理解できないレベルの「異質な」他者が想定されていないということである。ここには、理解できる人間しか存在しないというエゴイズムが垣間見られる。また、集団内で全員が親密に仲良くするという理想は、各個人の相性の有無や、友人間での潜在的対立といった現実的な問題を無視しているともいえる。

(iii) 内部収束・自律型は、愛情と尊敬をもって2者間で認め合うという、理想主義的な、成熟した関係である。しかしこれは、外部を無視・排除するからこそ成立する2者間の尊重関係であり、一種のエリート主義的な姿勢にも通ずる。排他的に2者間で尊重しあう構図は、文学的な理想論ではあっても、社会性を育むことを重要視するという教育的な価値観においては受容されにくいのだと考えられる。

(iv) 外部拡大・自律型では、全ての他者が緩やかに均質につながっており、何も排除しない。これは包摂型社会の理念を体現しているようにも思える。しかし実際は、異質性を尊重するように見えて、他者の領域に深く踏み込むことを回避しているにすぎない儀礼的な関係とも言えるのではないか。現代の分化・表面化したと言われる人間関係の様態を、理想的に変換したものであるとも解釈できる。

これらを合わせて見ると、絵本全体を貫く「友情至上主義」の仕組みが見えてくる。友だち絵本は以下2つの特徴をもって、「友情」の価値を称揚している。1点目は、「ひとり」でいることに否定的なイメージを付与し、「友だち」ができることによってハッピーエンドとなる構図を作り出していること。そして1点目は、どの類型にせよ、「友情」を語る際に「隠蔽」しているものがあるということである。先述したように、それぞれの「友情」類型にも様々な陥穽があり、それらが覆い隠されながら、「友情」の素晴らしさが強調されている。

最後に、絵本に表れている大人たちの思いを考察する。今回対象とした絵本においては、融合的で親密な交流や、葛藤をさまざまなかたちで乗り越える様子が描かれたが、ここからは子どもたちの社会化を促す、または対人関係における規律を教えるという教育的ねらいや期待が読み取れた。しかしそれだけでなく、他者との親密なつながりに対する大人の願望や憧憬が、子ども絵本の世界¹⁸に仮託されていることが考えられる。ここで大人の願望について述べるために、大人の友だち付き合いの現実を少し確認したい。ジンメルは、現代人を複合的・多面的に「分化」した存在であるとし、友人関係も多様に分化するからこそ、親密な関係の中にも「自

己顕示と自己抑制」(Simmel 1908=1994: 367)の均衡が必要だと述べる。また清水真木によると、社会における成熟した大人ならば「自分のことを他人に打ち明けたいという欲求」を「引力」と「斥力」のバランスを意識しながらコントロールせねばならず、そこに友だちとの付き合いのジレンマやさびしさがあるという(2005: 174-175)。これらの議論から、現実における現代人の「友だち」との関係性は、基本的に「引力」と「斥力」の釣り合いを必要とする「自律型」の傾向をもつことがわかる¹⁹。しかしその一方で、絵本においてはその自律型よりもはるかに多く、「引力」によってのみ引き合う「融合型」の関係性が描き出されていた。このことから、子ども絵本の「友情」に、現代の大人の憧憬や願望が映しだされていることが考えられる。「友情」の絶対的価値を掲げながら、自己と他者が容易に「友だち」になりすべて分かり合うさまを描く友だち絵本は、現実の対人関係における配慮や葛藤に日々さらされている大人たちがカタルシスを得るための一種の装置となっているのかもしれない。

以上をすべてまとめると、以下の図5に表すことができる。

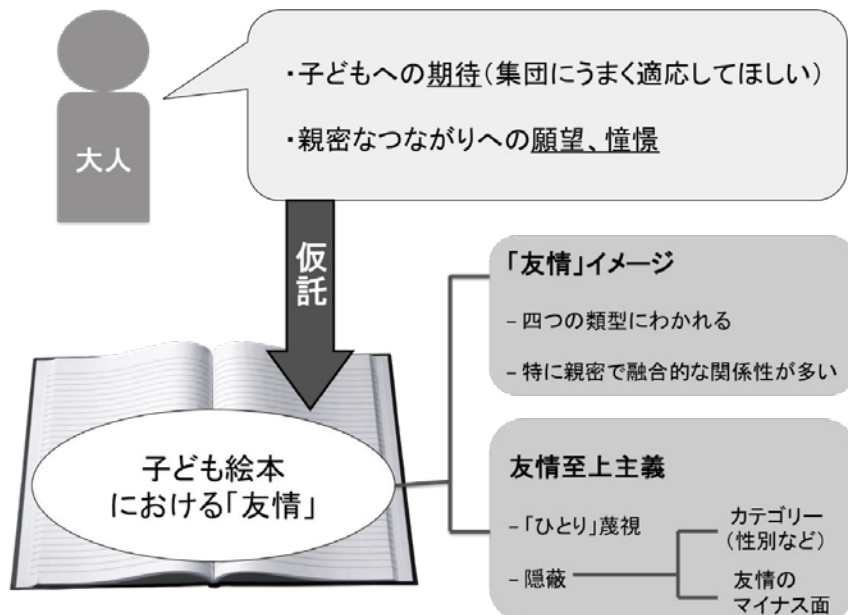


図5 絵本における「友情」の様相

5. おわりに

本研究では、①絵本における「友情」のイメージとそれに付随するメッセージを明らかにし、また②そこに反映される大人の側の願望やねらいに迫ることを目的とした。①に関しては、「友情」のあり方について四つのかたちが浮かび上がったが、その中でも特に親密な融合型が圧倒的に多いことがわかった。また、友情至上主義的なメッセージが込められ、それは様々な

要素の隠蔽や「ひとり」蔑視によって提示されていることが明らかになった。また②については、集団にうまく適応してほしいと願う日本の親の期待や、親密な絆に対する大人たちのノスタルジアや願望が、無邪気な「子ども」が自他未分化な存在として交わり合う描写の中に仮託されていることが読み取れた。

対象とした資料が限定的であること、また内容解釈も幾らか恣意的にならざるを得ないことなど、分析の精度に関して課題はある。しかし、「つながり」や「絆」に関心が集まる昨今、社会において無条件に肯定されることの多い「友情」のイメージとその語られ方を客観的に見つめなおすことは、これからの友情論や友人関係論などの議論を深めていく上でも有用であると考ええる。

また、今回は2000年代以降の絵本に限定したが、今後はさらに昔の資料にまで遡って、「友情」の描かれ方の経年変化を調べていきたい。加えて、書き手である作家、買い手である親、メッセージを受け取る子どもなど、様々な側面からのより幅広い分析を、今後の課題としたい。

〈注〉

- ¹ ただしテンニースは「朋友」について、「肉親および近隣とは無関係に、一つ心の仕事と考え方の条件および結果として、したがって職業あるいは技術の同一と類似によってもっとも容易に与えられる」(Tönnies 1887=1977: 52)と述べている。つまり、テンニースの「朋友」という言葉には、一般的な友人・仲間としての意味だけでなく、宗教や職業を通じた協働者との親密なつながりという意味が含まれている。
- ² 教育社会学の領域において実際の子ども同士の友人関係を研究したものとしては、住田正樹の研究が挙げられる(住田 2003)。住田は、友だちの有無が子どもの居場所形成や自己イメージ形成に大きく関係していることを明らかにした。
- ³ 絵本・児童文学研究者である香宗我部は、以下のように絵本の重要性を強調している。「絵本は、(中略)未来の社会を構成する者たちへの、現在のおとなたちからのメッセージと捉えることもできる。幼い頃の絵本体験は、大人が想像する以上に、深くこどもの心に残り、時には生涯を左右するほどの大きな力を持っている」(香宗我部・鈴木 2012: 14)。
- ⁴ 生田美秋によると、絵本の主題には「時代や地域を超えて変わらない普遍的なものと、時代の変化や地域によって変化が生じる場合がある」(生田ほか 2013: 21)が、特に近年は社会の変化に合わせて絵本の主題が多様化してきていると述べている。特に日本の絵本の動向としては、核家族化や地域社会のつながりの希薄化の中において、「現代の子どもの心の悩みの深刻化に呼応していじめや友情を主題とした絵本の出版が活発である」(生田ほか 2013: 18)という。
- ⁵ 例えば、河合(1998)は、児童文学作家である岩瀬成子の3作品の描写から、子どもの友情において生じうる関係の閉鎖性や屈折した心理を明らかにし、子どもの友情といじめの関連について考察している。また五十嵐(2014)は、内田麟太郎のシリーズ作品を検討し、それ

らを通じて子どもが対人関係スキルを学ぶうるとしているが、その内容は作品論にとどまっている。

- 6 この図書館は、主に乳幼児の子育て支援の専門図書館として平成 11 年に開設され、絵本や子育てに関する図書や資料を約 2 万 9000 点所蔵している。
- 7 「友だち絵本」の年代ごとの出版点数の違いに関しては、おもに 2 つの要素が絡んでいると考えられる。1 点目は、こどもみらい館子育て図書館における蔵書の年代的偏りの問題である。この図書館自体が 1999 年に建てられた比較的新しい施設であるため、70,80 年代など開設前の比較的古い絵本よりも、開設後の 2000 年代以降のものが積極的に選書されていった可能性がある。2 点目は、母数となる絵本全体の出版点数の問題である。総務省統計局の平成 17-27 年度版『日本統計年鑑』（毎日新聞社）「書籍の出版点数」によると、児童書の出版点数は 70 年代 16,672 点、80 年代 25,418 点、90 年代 32,127 点、2000 年代 49,560 点、2011 年と 2012 年のみで計 9,490 点と、右肩上がりに増加していることがわかる。したがって、タイトルに「ともだち」が含まれる絵本が 00 年代から多く散見されたことも、この絵本出版点数の全体的な増加によるところが大きい。
- 8 ただし、本研究の選定方法が含む限界に留意する必要がある。タイトルに「ともだち」を含む絵本のみを選定したことにより、ひとりの状態を肯定的に表現する作品を捕捉しづかったということが考えられる。『オオカミくんはピアニスト』(O)『やっぱりオオカミ』(P)『ひとりぼっちのかえる』(Q) など、人と違うこと、1 人であること、安易な社会化を拒むことを肯定的に表現する作品も存在する。
- 9 動物・無生物において性別を見分ける際は、①一人称や呼び名（「ぼく」「あたし」や「かえるくん」「うさぎちゃん」など）と、②話し方（「～だぜ」や「～だわ」など）③見た目における明らかな性別の区別（スカートを履いているなど）を判断基準とした。また、人間と動物・無生物混合の場合において、表 1 で「不明」と記したところは、人間の方は性別がわかるものの動物・無生物の方が性別不明であるという場合を表している。
- 10 中間型の例では、『さくらぐみのおともだち』(R) が挙げられる。個性の違う様々な登場人物たちがそれぞれの違いを認めて集団生活を営んでいるという点では自律型ではあるが、一方で何をするにも「みんな一緒」である点が融合型ともとれる。
- 11 欧米作品は、主にイギリス、フランス、アメリカ、ドイツ、カナダ、フィンランドから成っている。
- 12 R・ベネディクトは、日本人の行動や価値観の判断は、常に社会関係の中でとらえられ、周囲の人間や「世間」によって決められる傾向を指摘している（1946=2008）。加えて G・クラークと竹村健一は、欧米などは主義主張や信仰を重んずる「原則関係社会」であるのに対し、日本は身近な共同体における対人関係を重視する「人間関係社会」とであると述べている（Clark・竹村 1979）。これらに対しては批判も多くあるが、本稿では、ベネディクトやクラーク・竹村らの説を厳密に検討することが目的ではなく、こういった社会的イメージが通説としてよく語られるという例として紹介するに留める。
- 13 日本作品・欧米作品比較の分析結果に対し、本稿ではまだ考察を十分に深められていない。

今後は、欧米作品の描写の中にもどのような多様性が存在するか、その意味や社会的背景をさらに掘り下げていくことが必要である。また、そもそも日本（東洋）社会・西洋社会という二項対立で文化を議論することがはらむ問題についても深く注意し、論じていきたい。

- 14 この図では、「斥力」の意味が内部と外部において少し異なっている。内部においては、「尊重」であるが、外部においては「排除」である。
- 15 例えば、『ころんちゃんのおともだち』(S) では、「ぼくあたまにきた!」「そりゃそうよ、ぶひー!」(略)「うわーんかなしいよー!」「ほんとだね〜ビエ〜!」という描写が見られ、登場人物たちが感情を共有しあえることこそが友だちのいい点として述べられている。
- 16 友情において互いの同質性や近接性を親しさの必要条件としてしまうと、無理に友だちに同調せざるをえなくなったり、友だちが自分以外の人とも関係を確立しようとする要求を受け入れないといったことが起こりうる。ジンメルは、「親密な性格をもつ関係の形式的な担い手は身体的・心的な近接であるが、近親関係が同時的にもまた交替的にも距離と休止をも含むのでなければ、その関係もたちまち魅力を失うばかりか、さらには親密さの内容をも失う」(Simmel 1908=1994: 358)と述べている。また、土井隆義は、子どもや若者が同質の人間で固まる傾向について「ひたすら同質の類友だけとつながっている日常は、意外性による刺激を受けることがありませんから、徐々に活気を失って空気が澁んで」くるといい、「今日のいじめの多くは、異質な人間を排除しようとするものではなく、(中略) 同質な人間どうしによる常時接続の息苦しさで風穴を開けようとするもの」だとし、同質的で近接な関係の危険性を指摘している(土井 2009: 20-21)。
- 17 「友情」によって皆がつながるという物語は、特に小中の教育現場でのいじめ問題への解決の1つとしても提示されることが多い。ある中学校の「いじめゼロ集会」を取り上げた新聞記事には、いじめを減らす方策として「みんな友だちになる」などの意見が出された様子が書かれている(『読売新聞』2008年6月13日朝刊30面)。またいじめ防止策について話しかう小中学生の集いに関する記事では、「私たちはひとりぼっちをつくらず、一人一人の友達を大切にします」と全員で宣言する様子がある(『読売新聞』2002年7月5日朝刊32面)。「友情」が「いじめ」と対局のものとして提示されることは興味深いが、「いじめ」は「友情」の中においてこそ生じうることは忘れてはならない。「友情」や「友だち」に付随した肯定的なイメージを利用することで、問題への対処から遠ざかってしまうことを自覚すべきであろう。
- 18 子ども絵本については、大正期のロマン主義の流れのもとでつくられた子ども向けの本と、今回扱っている絵本とで性質の違いがあることに留意したい。河原和枝(1998)は、大正期の児童雑誌『赤い鳥』において、一人ぼっちで弱く寂しい子どもがもつ優しさ・繊細さの描写に着目し、そこに託された大人の「癒し」を見出した。一方、今回分析対象とした「ともだち絵本」は、コミュニケーション能力に富んだ明るく朗らかな子どもが描かれる。ここから、「ともだち絵本」は、『赤い鳥』のようなノスタルジア(過去志向、現実退却)志向ではなく、現実的適応志向であるといえる。
- 19 ここで、ジンメルの主張と本研究とでは時代的隔たりがあることは留意する必要がある。し

かし、土井隆義（2009）や本田由紀らの調査（2011）などにおいても、友だちと一定の距離感を保つことに注意を払うという現代の対人関係の特徴が指摘されている。この点で、ジnmelの主張と現代の対人関係の特徴とで共通性はあるといえよう。例えば、本田（2009）の調査によると、中学生女子においては『仲の良い友だちでも私のことをわかっていない』と「感じる」や「自分の気持と違っていても人が求めるキャラを演じる」といった項目がそれぞれ47.4%、35.6%にも達しており、友だちには自分の心の中を見せないような側面があることが述べられている。

〈引用文献〉

- Allan, Graham, 1989, *Friendship: Developing a sociological Perspective*, Harvester Wheatsheaf. (=1993, 仲村祥一・細辻恵子訳『友情の社会学』世界思想社.)
- Ariès, Philippe, 1960, *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien régime*, Plon. (=1980, 杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生——アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房.)
- Benedict, Ruth, 1946, *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*, Boston: Houghton Mifflin. (=2008, 角田安正訳『菊と刀』光文社.)
- Cicero, 1990, *Laelius, On Friendship (Laelius De Amicitia) & The Dream of Scipio (Somnium Scipionis)*, Warminster. (=2004, 中務哲郎訳『友情について』岩波書店.)
- Clark, Gregory・竹村健一, 1979, 『ユニークな日本人』講談社.
- 土井隆義, 2009, 『キャラ化する／される子どもたち』岩波書店.
- 本田由紀編, 2009, 「神奈川県公立中学校の生徒と保護者に関する調査報告書」ベネッセ教育研究総合研究所ホームページ. (2017年2月3日取得,
<http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3204>)
- , 2011, 『若者の気分 学校の空気』岩波書店.
- 五十嵐沙織, 2014, 「絵本『おれたち、ともだち!』シリーズに見るともだち関係の構築——動物たちの気持ちの揺れ動きに子どもは何を感じるか——」『児童文化研究所所報』36:27-37.
- 生田美秋, 2013, 「現代の絵本(1) 主題の多様化」生田美秋・石井光恵・藤本朝巳編『ベ——シック絵本入門』ミネルヴァ書房. 18-21.
- 石川善樹, 2014, 『友だちの数で寿命はきまる 人との「つながり」が最高の健康法』マガジンハウス.
- 香宗我部秀幸, 2012, 「絵本とは何か?」
- Kant, Immanuel, 1797, *Die Metaphysik der Sitten*. (=2002, 池尾恭一・樽井正義訳『カント全集 11——人倫の形而上学』岩波書店.)
- 香宗我部秀幸・鈴木穂波編『絵本を読むこと』翰林書房.
- 河合麻依子, 1998, 「現代の児童書における友情の一側面——いじめについての考察」『東京家政大学博物館紀要』3:117-134.

- 河原和枝, 1998, 『子ども観の近代—『赤い鳥』と「童心」の理想』中央公論社.
京都市子育て支援総合センター「こどもみらい館の概要」17.
<http://www.kodonomirai.or.jp/gaiyou.pdf> (閲覧日: 2015年11月28日)
Lucrece, 1948, *De La Nature*, par Alfred Ernout, 2 vols. (=2014, 神崎繁訳『アリストテレス全集 15』岩波書店.)
Montaigne, Michel de, 1922, *Les Essais de Michel de Montaigne*, ed. P. Pierre Villey, Paris, Felix Alcan, 3 vol. (=1965, 原二郎訳『エッセー (1)』岩波書店.)
西出博子, 2009, 『友だちが増える話し方のコツ』学習研究社.
親野智可等, 2007, 『「友達力」で決まる!——子供の「人間関係力」を育むために、親にしかできないこと』光文社.
Rousseau, Jean-Jacques, 1969, *Émile, ou De l'éducation*, Oeuvres complètes de Jean-Jacques Rousseau, t. VI, Emile, Pleiade. (=1978, 平岡昇訳『ルソー・エミール』河出書房.)
清水真木, 2005, 『友情を疑う』中公新書.
Simmel, Georg, 1908, *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*. Berlin: Duncker & Humblot. (=1994, 居安正訳『社会学 上』白水社.)
住田正樹, 2003, 「こどもの『居場所』と対人関係」住田正樹・南博文編『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会. 101-168
Tönnies, Ferdinand, 1887, *Gemeinschaft und Gesellschaft*. (=1957, 杉之原寿一訳『ゲゼルシャフトとゲマインシャフト 上』岩波書店.)
山名淳, 2012, 『「もじゃぺー」にしつけを学ぶ——日常の「文明化」という悩みごと』東京学芸大学出版会.

〈参考文献〉

- Barthes, Roland, 1966, *Introduction a l'analyse structurale des recits*, Paris: Seuil. (=1979, 花輪光訳『物語の構造分析』みすず書房.)
土井隆義, 2004, 『「個性」を煽られる子どもたち』岩波書店.
——, 2008, 『友だち地獄』筑摩書房.
橋口英俊, 1993, 『人間関係についての相談』ぎょうせい.
藤本朝巳, 1999, 『絵本はいかに描かれるか』日本エディタースクール出版部.
飯田哲也, 1991, 『テニース研究』ミネルヴァ書房.
菅野仁, 2008, 『友だち幻想』筑摩書房.
——, 2003, 『ジンメル・つながりの哲学』日本放送出版協会.
Kehily, Mary Jane and Joan Swann, 2003, *Children's Cultural Worlds*, Chichester: John Wiley & Sons Ltd in association with The Open University.

- 木村涼子, 1999, 『学校文化とジェンダー』 勁草書房.
- Nikolajeva, Maria and Carole Scott, 2006, *How Picturebooks Work*, New York: Routledge Taylor & Francis Group. (=2011, 川端有子・南隆太訳『絵本の力学』玉川大学出版部.)
- 奥村隆, 2013, 『反コミュニケーション』 弘文堂.
- 小野寺理佳, 2004, 「子ども絵本における祖親性表現」『教育社会学研究』 75: 5-23.
- 佐々木宏子, 1993, 『絵本と子どものころ』 JULA 出版局.
- Spencer, Liz and Ray Pahl, 2006, *Rethinking Friendship: Hidden Solidarities Today*, Princeton: Princeton University Press.
- 高橋英夫, 2001, 『友情の文学誌』 岩波書店.
- 竹内オサム, 2002, 『絵本の表現』 久山社.

〈文中・注で引用した絵本〉

- (A) マティアス・イエシュケ, 2010, 『ペーター・ブムのともだちさがし』 フレーベル館.
- (B) 柴田愛子, 2004, 『ともだちがほしいの』 ポプラ社.
- (C) 内田麟太郎, 2012, 『ともだちできたよ』 文研出版.
- (D) 原田えいせい, 2013, 『たったひとりのともだち』 金の星社.
- (E) トーベ・ヤンソン・松田素子, 2008, 『ムーミンのともだち』 講談社.
- (F) 新沢としひこ, 2002, 『ともだちいっぱい』 ひかりのくに社.
- (G) デビット・マッキー, 2003, 『エルマーのともだち』 BL 出版.
- (H) トッド・パール, 2001, 『ほんとのともだち』 フレーベル館.
- (I) エリック・バトゥー, 2000, 『いつだってともだち』 講談社.
- (J) 内田麟太郎, 2000, 『あしたのともだち』 偕成社.
- (K) いもとようこ, 2002, 『ともだちいいな』 岩崎書店.
- (L) エマ・チチェスター・クラーク, 2006, 『メルローズとクロック ともだちっていいな』 評論社.
- (M) ロブ・ルイス, 2001, 『と・も・だ・ち』 評論社.
- (N) デビット・マッキー, 2004, 『エルマーのあたらしいともだち』 BL 出版.
- (O) 石田真理, 2008, 『オオカミくんはピアニスト』 文化出版局.
- (P) 佐々木マキ, 1977, 『やっぱりオオカミ』 福音館書店.
- (Q) 興安, 2011, 『ひとりぼっちのかえる』 こぐま社.